

県内一の生産量 白根産チューリップ

平成9年度チューリップ出荷量

(北陸農政局新潟統計情報事務所調べ)

●県内ランキング (単位：千本)

1	白根市	7,340
2	新津市	4,240
3	五泉市	3,500
4	黒埼町	3,130
5	中条町	2,120
新潟県合計		33,800

●全国ランキング (単位：千本)

1	新潟県	33,800
2	埼玉県	23,000
3	徳島県	12,500
4	茨城県	7,620
5	兵庫県	3,000
全国合計		107,600

●市町村別ランキング (単位：千本)

1	深谷市(埼玉県)	14,900
2	鳴門市(徳島県)	10,775
3	白根市(新潟県)	7,340
4	八郷町(茨城県)	5,000
5	越谷市(埼玉県)	4,500

白根市のチューリップの切り花生産出荷量は県内一。全国でも三位というトップレベルの園芸作物です。関東地方では有名な「しろね産チューリップ」。皆さんご存じでしたか。

白根市では球根や切り花栽培は冬期の就農部門として広く普及しています。市内のチューリップ切り花を扱っている農家は約五十戸、約六ヘクタールの栽培面積です。生産量は年々増加傾向にあり、全国トップクラスを誇っています。

栽培しているチューリップは品種が多様で、約百五十品種(平成十年登録)。代表的なのはクリスマスドリム、ピンクダイヤモンド、パレリーナ、メリーワイドウ、エルデフラス。これらは、一品種約四十万から六十五万本生産されています。主に赤やピンク系のものが好まれています。

球根栽培は戦前から行われていて、ハウス栽培が主体でした。昔は球根を採るために花を捨てていました。しかし、捨てた花を集めていた人が高い値段で売っていたのを知り、チューリップの切り花栽培が始まりました。それまでは、市場で切り花が売れるということを知らなかったそうです。

白根市では主に信濃川沿線の庄瀬と白井地区を中心に生産が

盛んです。庄瀬地区では約二十六年、七年ほど前から栽培していましたが、昭和四十九年ごろに、本格的にチューリップ栽培を行う庄瀬切り花組合が生まれました。当時は球根の元値が高く、あまり加入する人がいなかったそうです。

白井地区では昭和三十年前半に五、六件ほどの農家がガラスハウスに天然ガスで沸かしたお湯を巡回させて、温室の切り花栽培を行っていました。

十五から八十パーセント)です。これを十月上旬に植え、品種にもよりますが、植えてから約五十から六十日で花が咲きます。収穫後すぐに、機械や手作業で花採り、長さを選別して品質を同じレベルにします。選別は花の大きさ、花の固さなど四段階

の品質分類と、茎の長さによって約四段階の階級に分けるものとなり、この選別が一番忙しい作業となります。そして、十一月下旬ころから四月の十日くらいまで出荷が続けられます。栽培の苦労はハウスの上が長年の栽培によって連作障害を起

こしつつあることや室温の管理です。植え付け時は十度前後の状態にし、徐々に温度を上げていき、花が咲くころには十七、八度くらいで管理しています。温度によっても色の出方が違い、高温であれば色が薄くなったり、品種の特性によって温度管理も異なったりするそうです。このほか、植え付けと収穫はすべて手作業のため、労力は大変なものになります。

もつと白根産チューリップを全国に広げていくために生産者全体が一体となり「しろねブランド」を確立していかねばなりません」と生産農家の西脇博雄さん。切り花農家が栽培協定を結んで、今までよりも大きな球根を使うことに統一して、品質の良いポリウムのあるチューリップを作ろうという取り組みも図られています。

役立つ情報を得ようと昨年から視察研修を行っています。オランダでは、新潟県のチューリップ切り花生産量と同じくらいの規模を一人で耕作しています。現地では業者とチューリップ栽培農家を訪問。業者を訪れて管理費、冷蔵システム、経費の出し方など経営面を勉強。六百万本のチューリップを栽培している農家では、ピートモスという栽培土を使ったコンテナ栽培を行っていました。そこで、品質も良く素晴らしい花の出来映えを目にし、「オランダの考え方は合理的で無駄がない」「今の自分たちはこんな事をしてはだめだ」と実感したそうです。



平成四年から出荷量は増え、「しろねブランド」として確立してきている白根産チューリップですが、これまでは生産費をどう落としていくかという栽培面での取り組みが課題でした。近年では、ガーデニングやフラワーアレンジメントなど、花に親しみ花のある生活を楽しむ人が増え、花に対する消費者のニーズも多様化しています。現在は、販売価格の安定、多様な販売網の確立、消費者の求める量や品種の需要にどこまでこたえていくかなど、情報化時代における販売戦略が課題となつてきています。また、産地直送のラッピング販売など鮮度重視の販売をしていくことや産地名、生産者名が分かるブランド化も求められてきています。

●切り花農家、オランダへ渡る
今年四月、市内の切り花農家のグループが、チューリップの国オランダへ視察研修に行つて来ました。

「球根の現状を知るために自分たちで行って見てきたい」。現状を把握し、同業者との交流を深めるため、そして、今後の直接輸入などを検討するうえで

「日本のトップ産地として、

「球根の現状を知るために自分たちで行って見てきたい」。現状を把握し、同業者との交流を深めるため、そして、今後の直接輸入などを検討するうえで

